
wind heart

Dragon-me

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

w i n d h e a r t

【Nコード】

N 4 6 0 6 T

【作者名】

D r a g o n — m e

【あらすじ】

親に反発して家出し、埼玉県の田辺町立南中学校に入学した一人の少年、エルウェリア？リード。そしてそこで出会う個性豊かな仲間達。……ってちょっと豊か過ぎじゃありません？

リードに期待を寄せる校長先生によって創部された吹奏楽部。目指すは夢の東日本大会。「みんな全く違うけど、音楽が好きな思いは一緒だ」

主要登場人物紹介（前書き）

ある程度のネタバレを含みます、ご注意ください。

主要登場人物紹介

主人公 エルウェリア？リード (12)

中学1年。吹奏楽部部长。楽器は演奏せず、指揮者。

両親は超有名音楽家で、父がアメリカ人で母が日本人。上に兄が2人いる。そのため金髪で日本人顔。

この小説の主な語り手。

やや短気でひねくれ者。指揮者の英才教育を受けていたため、音楽についてはかなり博識で、耳が究極に良く指揮がプロ並み。自分でやる事に関しては努力家。

藤田 流音 (？) 準主役

中学1年。パートは打楽器及びトランペット。

アンドロイド。コードナンバーはr-6。

基本的に元気、エルウェリアにくつついていく傾向あり。アンドロイドだが、心優しく気遣いができる。催眠術を使いこなせるが、めったに使用しない。また、体術による戦闘能力も高い。

入学1日目、彼に何か惹かれるものがあり、エルウェリアに話しかける。

田口 瞭 (12)

中学1年。パートはチューバ。

入学式の日女子に性転換してしまった不運な男子。黒髪ベリーショート。

めっちゃくちゃ元気で、口調と行動は男の時と変えていない。うるさい。

運動神経がケタ違い。肺活量もケタ違いでチューバなのに180

秒ロングトーン可能。

功徳林 李 くどりん すもも (12)

中学1年。パートはユーホニウム。大人しく気弱で、常に敬語を使う。茶髪で、ロングヘア。

二宮 和湖 にのみや わこ (12)

中学1年。パートはユーホニウムで、李のパートナー。黒髪のポニーテール。

人进行思ひやる気持ちに長けており、李のいるユーホに抜擢された。“自分がやる”という意志も強い。本人を含めた多くの人が気づいていないが、閉ざされた心を開く特殊な波長を常に発している。

白川 雪 しらかわ せつ

中学1年。パートはチューバ。一応完全な男子。千里眼が使える。冷静沈着で、エルウェリア以上に冷めた性格だが、全ての物事を人並み以上に処理する。なぜか瞭とは幼い時からの大親友。瞭と比べて、音量には劣るが音色は抜群にいい。

1 始まりの日の自宅にて

出てやる。

こんな家なんて出てやる。

お前らの言う通りになんかなるか。

独り暮らしの食卓で、俺はあの時の事……3週間前の時を思い出していた。あれ以来親と会っていないし、これからも会えないと思うが、別にそんな事は気にしない。

俺は他人に道を決めつけられるのが嫌だ。そんな事、俺の親なんて分かってもしない。

小さい時から俺は他人に指図される事が嫌だった。

俺は小さい頃から普通に幼稚園とか小学校とか通いたいと思っていた。普通の生活がしたかった。

なのに親は、そんなくそつたれた所に行くな、音楽の英才教育を受けて世界一の音楽家になれ、と俺の意見を切り捨てた。

俺はそれが大嫌いだった。

ただガミガミ言われるだけのもの、としか思わなかった。絶対に、幾ら頑張ろうが、褒められないのだ。言われるのはいつも欠点ばかり。

そして、俺には2人兄がいるのだが、俺は常に兄と比較された。もちろん、悪い方だ。

俺はこのような生活が本当に嫌だった。でも……なぜか音楽は嫌いになれなかった。

小学校卒業後、俺は中学校に通わせて欲しいと頼み込んだ。案の定、返って来た言葉は、そんなくそったれた所に行くな、だった。

もう嫌になった。これ以上縛られたくない。俺はその日の内に家出した。

あれからもう3週間くらい経つ。今、アパートの一角を大家さんの計らいでタダで住まわせてもらっている。そのおかげで生活には心配がなかった。

そして今日は、中学校の入学式だ。

食事を終えて皿を洗い、歯を磨いてブレザーに着替える。そして、新品のバッグを持って外に出た。

外の道には俺達の門出を祝うかのように桜並木が咲いていた。期待が膨らんで若干ハイだ。

これから俺が通う事になる田辺町立南中学校。俺にとって初めてのまともな学校生活。ごく普通の中学生になれるのに心から嬉しく思った。

学校に近づくにつれてブレザーを着ている生徒の数が増えていった。親の付き添いで登校する者、友達と喋りながら道を進む者、また俺と同じように一人で歩く者。

そんな光景を見ているうちに実感が湧いてきて緊張と期待が大きくなっていった。

ただ、近所の住人からは、怪奇の目線を送られていたのを痛い程感じた。

……だから、俺は日本も嫌いだ。両親と同じ位。

2 入学式前の教室で

今、俺は初めて教室というものに入ろうとしている。ちょっとした学活があつて、入学式の説明を受けるためだ。全員呼名があつて返事すること位分かつてる。

ああ、面倒臭い。

ぶっちゃけると、あまり俺は期待してない。逆に退屈さが実感を湧かせる……のか？

騒がしい会話という不協和音が漏れ出す。傷でガラスがだいぶ曇った、古いドアを横にスライドするとき、俺は覚悟した。

俺の髪は、短髪の金髪だ。アメリカと日本のハーフってやつだが、俺の名前は“エルウェリア？リード”という、アメリカ人の名前である。

偏見の国日本で、どうして日本人名にしないのか謎だ。

そういう訳で、一般人から怪奇の視線を送られながら登校した俺は、より一層の覚悟を決めて教室のドアをなるべく音を立てないように、でも普通に開けた。

俺に視線が集まる。

会話は止んでいないとはいえ、また幾ら身構えていたとはいえ、背筋が硬直する。

しかし1秒後、何事もなかったかのように全ての視線は俺から外れた。

あいつら何とも……？
と思ひながら、窓側後方より2番目の机

＞リード？エルウェリア君 入学おめでとう！＜

と、プリントされてある無機質なゴシック体の字と、ポップな桜の木の絵がある横長の小さい紙を見つけ、そこに座る。

時計は9時14分。学活は30分。16分、つまり1560秒の猶予がある。ちなみに式のスタートは40分。

……まあ、あれだ。最初の内は通学時間を把握していないから早く来がちな傾向がある。パツと見てクラスの3分の2は来ているな。

ずっと箱入りだった俺に知り合いなんている訳ないし、とりあえず赤カバーの生徒手帳が配られていたので、それを読むことにした。

ある程度読むと、校歌のページが出てきた。

メロディーだけ記されている、単純な楽譜。それを見ると、俺は無意識に伴奏を頭で付けたくなる。

始めピアノだけだったのが、弦が優しくハーモニを奏でる。第二メロディーでは金管と打楽器がメロディーに相槌を打つ。そして……

「……君も一人？」

脳内コンサート中に、見知らぬクラスメートの女子が俺の指揮を止めた。

……まさか、俺の金髪からかおうとでも？ とは一切思わなかった。

目が、綺麗だった。

「……そうだけど？」

校歌のページに指を入れ、生徒手帳を閉じる。

俺が人と話すことに慣れないのは予想がつくだろう。

「じゃあ、お話しよ。私は藤田^{ふじたるおん}流音」

彼女の笑顔につられ、正体不明の緊張が取れていくのが分かった。

3 中学校生活1日目終了後の校長室で

「……リード？」

「ん？」

入学式が終わって、ついでに最初の全日程？（午前中学活1時間のみ）が終わって解散になったとき、藤田が声をかけてきた。

「私も一緒に行っている？ 校長室」

「……それは俺だけの用だ」

実は、初日からいきなり校長室に呼び出しを食らったのだ。食らった、とはいっても別に悪行をしたからということではないらしい。

面倒な上学校側の意図が全く分からんから“食らった”と表現しただけのことだ。

「……とにかくそれは無理だ」

荷物を持って席を立ち、さよなら代わりに左手を少し上げた。

「待って！ ……仕方ない、尾行しよ」

――――

「で、何で尾行しよとか言っていたクセに思いつきり出てきている

んだよ」

俺の隣には、藤田。

「気付いてた？」

「思いつきり。それより、とりあえず帰れ」

俺の一番の願い。藤田に帰って欲しい。

しかし、その願いは天に届くどころか高さ3 mの天井にも届かず、

「嫌」

たったこれだけで散った。なんとかして帰らせる方法をしばし考えた。

……諦めた。

「早く入ろう！」

本人は恐ろしく積極的。目がもうギンギラギンどころじゃない。ギンギラギンギンギンギラーン！あたりが妥当か。

「……分かった。ただ、余計な口出しはするな」

校長室に似つかわしくない普通の教室のようなドアを開けると、目に優しい緑色の絨毯がまず目に入ってきた。そして、俺に意味不明のまま部屋に来させやがった校長が迎えに来た。……校長の割に

は若いな。

「待っていたよ。君がリード君だね。……隣は？」

「ああ、隣は……」

勝手について来た奴です、と言おうとしたが。

「私も、その吹奏楽部の話に興味があつて」

……吹奏楽部？

「何で知っているんだ？ 生徒には一切伝えていないはずだが……」

は……？

もうここでその後の話の筋は読めた。

吹奏楽部部長をやれ、だろ。

「リード君は聞いたか？ ここに来る前に吹奏楽部について話すって」

「俺は聞いてません」

俺は吹奏楽を知らない。子供の時の英才教育はクラシックばかりで、吹奏楽はスーザやホルストなどが作ってた、しか知らない。

ったく、身勝手すぎだ。

「……そうか。じゃあ話に入るか、座っていいぞ。……あ、藤田さんもな」

俺と藤田はそれぞれ一人掛けの黒いソファに腰掛けた。内心キレているが、まだ平静を装う。

「おい、最初から吹奏楽部が目的で来たのか？」

声を少し潜めて藤田に聞く。

「まあね」

こいつはどこで情報を仕入れて来たんだ？

「じゃ、リード君。さっきも言ったが、吹奏楽部を今年から創部したい」

「で、その部長を俺がやれと」

「そうだ」

……やっぱるか。

恐らく有名音楽家を両親に持つ俺の戸籍を見れば俺に頼みたくなるよな。

だが、生憎俺は知らないんだよ、吹奏楽を。

俺を上っ面だけで判断するな。俺の大っ嫌いな両親だけで俺の能

力を見るな。

……ふざけんな。

「……やりません。じゃ、俺は帰ります」

「ちょっと待て！　おい！」

バンツ、と怒りに力を任せて扉を閉め、昇降口に向かって歩き出す。

人間って、自己中だ。子供の俺もそうだが大人の方がとんでもなく自己中だ。

……たく、もしここが日本じゃ無かったらな。

「リード、待って！」

校門を出ようとした時、藤田の声が聞こえた。今回藤田は悪くない。苛立ちを抑えて後ろを向いて立ち止まった。

「何だよ」

ただ、“何でやらないの！？”　とか言われたら無視して帰るつもりだった。

が、彼女は違った。

「ねえ、一緒に帰ろ？ どうせ一人でしょ？」

「何でだよ。いきなり噂されたいのか」

表向きは嫌そうにするが、本当は嬉しかったのかも知れない。

簡単に言えば、分からない。

「平気だって、もうみんな帰っちゃったし」

「……たく。勝手についてきたきやついて来い」

きっと、精神安定剤が欲しかったのかも知れない。今までいつも孤独だったから、自分の感情が高ぶると落ち着くまで時間がかかり、その上喪失感が残った。

しかし。藤田がいることで、俺は落ち着ける。そして……

気が付くと笑っている俺がいた。

4 孤独な家路と家で

藤田と別れ、家路を俺一人で歩いている。

藤田は、現実から俺を逃避させてくれた。しかし孤独な家路は、現実を再び俺の目の前に持ってきた。

分かっている。

俺がまだガキなのは分かっている。

本当なら、俺は部長をやるべき立場。

ただ、俺はどうしても納得が行かない。

あの先入観だけのクソ校長に従うと、俺は負けな気がする。それに、両親のことに触れてきやがったから更に気が悪い。

たったそれだけか？

そう、それだけだ。

自分の問いに適当に答え、勝手に納得する。……自分が自分の核心に入って来なせない為に。

大通りから離れ、西には細い道路を挟んで茶畑、南には小さく砂利でできた駐車場、その他二方は他人の一軒家に囲まれた所が俺の住むアパート。生憎、学校から非常に遠い。

そして、今ようやく着いた所だ。

今日学校から給食がなかったので、とっとと昼飯を作って食う。そして、いつもならクラシックのCDを流すが、今日は違った。

一昔前のウィンドウズビスタのPCを立ち上げ、ネットで吹奏楽曲を流すことにした。

“エル？カミーノ？レアル”。作曲したアルフレッド？リード、という名前は吹奏楽に疎い俺でも知っている。

再生ボタンを押し、テーブルに戻って食べ始める。金管の短いファンファーレの後、木管の細かい連符、ホルンも吠える。そして主題だと思われる細かいパッセージがホルンによって奏でられる。

やはり、自分の真の気持ちは隠し切れないのかもしれない。俺がなぜわざわざPCを起動して吹奏楽を聴こうとしたのはどこかに興味があつたから、だろうか。

トランペット辺りの金管がまた違う、今度はスラーのメロディーを奏で、木管が細かい動きの相槌を打つ。更に聴き慣れない中音の、恐らく金管の楽器も加わる。

『私も、その吹奏楽部の話に興味あって』

現に入部したいという奴もいる。こんなガキみたいな意地張って、自分どころか奴にまで迷惑掛けようとしていたのか。

俺は食事の手を止めて立ち上がり、PCに向かった。そして曲を停止させた。

気付いた。嘘のつけない自分の気持ちに。

テーブルに戻り、無音で黙々と昼飯を食べ続ける。

……本当にガキだったな、俺は。

食べ終わり、食器の片付けをとっとと済ませて、再びPCに向かい、再生ボタンを押した。

5 中学校生活2日目の校長室及び廊下で

クソ校長は準備周到だった。

俺が入学すると知った瞬間から、吹奏楽部を立ち上げこの学校の誇り、更には町全体の誇りにもしようとなりとあらゆる事を実行したらしい。

例えば、楽器。今まで南中には吹奏楽部はなかったので吹奏楽の楽器は全く無かったのだが、クソ校長は祖父の遺産を全額注ぎ込んで、そこそこの吹奏楽楽器を全部揃えた。大体、計20000〜3000万、いやもっとあるだろう。

それに、クソ校長はすぐ近く（徒歩1分）にある、クソ校長の知人の持つホールの一部を貸し切り、吹奏楽部専用ホールにしてしまった。

どんだけ周囲に恵まれてんだよ。祖父といえ知人といえ。

とりあえず2日目の全日程？（学活3時間のみ）を終えた後、昨日どうやら入部を済ませたらしいが勝手についてきた藤田と、校長室に行きクソ校長に入部して部長をする件を伝えた。

クソ校長は、最初驚いたが、その後満面の笑顔を浮かべ、泣き、「ありがとうっ！ 期待してるよ！」と。

例え先入観の塊でも、期待されるのは悪くないな。

そして、顧問は今年新任だという……

「清水真紀です。中学からずっと吹奏楽やってます。今でも、“たなべウインドオーケストラ”という社会人バンドでパーカッション（打楽器）をやっています。昔は、チューバやフルートもやってました。顧問ですけど、きっとリード君や藤田さんに頼ってしまうことも、いや、頼る事の方がきつと多いですが、私も初めてなりに頑張っていきたいと思います。よろしくお願いします」

見た所22〜23歳位か？

「「お願いします」」

俺は適当に、藤田は笑顔で丁寧にお辞儀して。

その後、クソ校長から来週の月曜日にある新入生歓迎会の事と、その翌日から始まる仮入部について話があった後、校長室を後にした。

「……ね」

二人並んで廊下を歩く俺と藤田。

「ん？」

「この後、あのホールの前に行かない？」

「あのホール、って校長が占領したホールか？」

「うーん……そう。一回見た方が良くない？」

藤田も俺も、ホールがある道は通学路として利用していない。

「ま、そうかも知れないが……面倒臭い」

「何で？」

俺と藤田は階段を降りる。

「あの坂は上りたくない」

徒歩1分の距離ではあるが、その間は急な上り坂がある。足が疲れる、というのが一つ。

それに、あの坂を上って帰る奴が大勢いて、よく道路目一杯に広がって帰る。俺は人混みが嫌いだし、それに、よく地域の人から苦情が来るらしいが、俺は奴らと揃って注意されたくない。

俺の金髪は日本人にとってはインパクト抜群だ。俺が無関係でも、金髪の男子生徒のグループが広がっていた、と言われるのは目に見える。

考え過ぎではない。髪が金髪なだけであって他は完全に日本人顔だし、“金髪＝不良”という先入観の日本人にとって当たり前前に俺を不良としてでっち上げるだろう。

そして、不良は大勢でつるむという先入観で、俺が例え制服を着崩していたりするやんちゃな男子グループを抜かす時に横に並ぶ瞬間だけを見られる。

もしそうだったら面倒だ。そして、一種の名誉毀損だ。

また、別に今じゃなくて、また別に来る時が確実にあるのだから、その時でいいじゃないか、と思った。

実際、真ん中のことは藤田には言わなかった。いや、口が裂けても言えない。

「うん、そうだね。早とちりするのもあるだし、私達が急に來て入れてくれるかも分かんないしね」

結局、昨日と変わらない通学路を二人で帰ることになった。が……

「おい、中学のクセして髪染めて彼女連れてんじゃねえぞ。生意気なんだよ」

人通りの少ない細道。前から、数人の体格のいい男が。歳は25
〜35。

……暴力団に、絡まれた。

6 通学路沿いの小さな空き倉庫で

後ろに後退する俺。しかし藤田は下がるどころか前に出た。

「なんだ嬢ちゃん？」

暴力団の一味も間合いを詰め威圧する。

動じない藤田。威圧され体が動かず俯く俺。

……情けない。俺がもっと強ければ。

「邪魔をするのなら……」

と、暴力団の一人が言いかけたのが聞こえた時、パチンと指を鳴らす音がした。

直後、数人の倒れる音が。

何があっただ……？

「藤田……？」

混乱したまま、顔を上げる。倒れた暴力団一味の前には、藤田が立っているだけ。他に人はいない。まさかこいつが……！？

「……ちょっと来て」

いつもの藤田とは別人のような、真剣な口調。藤田は誰もいない

小さな空き倉庫に俺を呼んだ。

何がある。俺は何をされる。渦巻く思考。勝手についていく体。

倉庫の中は薄暗く、埃っぽい。その空間に、たった二人向かい合う。

急に色々な事が起こり過ぎて、まだ今の状況を飲み込めない。

「これから話すことは、全部本当のこと」

倉庫の中に藤田の声が響く。決意が現れている、はっきりとした声。

「リードは、全部信じてくれますか？」

俺に敬語を使った。きつとんでもなく重大なことを、俺に話そうとしている。

……俺は正面から受ける。例えどんなに想像を越えたものだしとも。

俺は一つ、頷いた。

「ありがとう。じゃあ、話すね」

体が強張る。

目の前にいる藤田は、もういつもの藤田では無かった。

藤田は、躊躇う様子もなく口を開いた。

「……実は、私は人工生命体。アンドロイド。コードNo. 6－r」
身構えていたが、想像を遥かに絶するような告白。言葉が出ない。
ぼやける視界。

再びピントを合わせた時の彼女の表情は、人間味が無かった。

「……研究所を脱走した、アンドロイド。ずっと誰かに管理される
運命が、嫌だった」

言葉の一つひとつが心に衝撃を与える。立っているのかどうか分から
ない。

藤田の表情が、心なしに少し歪んだ。

「……私は、私自身成功作か失敗作か分からない。だからいつ君の
元からいなくなるのかも……分からない」

苦しい。よく分からない。けれど苦しい。正面から、藤田の過去
という刃を受け続ける。

藤田は俺に信じてもらおうが無理にアンドロイドでいようとしてい
たらしかった。

でも……藤田には無理だった。

「だから……いなくなったら、ごめんね」

ところどころかすれる藤田の声。完全に、人間だった。

必死で涙をこらえようとするように見える、俯く藤田。そいつをしつかり見ながら、冷静になって心を整理する俺。

無音が、空間を支配する。

しばらくして、俺は藤田に投げかけた。

「お前も……人に支配されること、嫌か？」

藤田がはっとしたような表情で顔を上げる。頬には二本の線が伝っていた。

数秒の沈黙。

「……うん」

ようやく答えた藤田は、はっきりとした声でなく、どこかこもった声。

「そうか。実は俺もだ。……昨日、俺が校長にキレたこと、覚えてるか？」

俺は、俺の過去も藤田に知らせておこうと決めた。

正直、イライラする。

鬱陶しくなる。

何一つ、自分にとってメリットは無い気がする。

しかし、藤田もきつとそういう気持ちで言ったに違いない。しかも、まだ初めて会って2日しか経っていない俺だけに。

アンドロイドに気持ちはあるかって？

……そんなの、本人しか分からない。

「うん」

藤田も、俺のこと正面から受けようとしているらしいし。

「それは……な。俺が吹奏楽に疎いのも知らず押し付けてきやがったのもそうだが、俺の両親に触れたことに特にムカついたからだ」

俺の目をしっかり捉える藤田。

「俺は、ずっと両親に縛られ続けてきた。外には一切出して貰えず、音楽の英才教育やその他高校の勉強ばかり。それもずっと“お前はダメだ”と言われ続けるだけの。小学校にも通わせて貰えなかった。“そんなくそったれた所に行くな”、てな」

心の奥深い所で湧き上がる怒り。それを無理やり抑えようとす

る冷静さ。

「無論、中学に行きたいと言った時も、まるっきり同じ台詞を言われた。俺は……家出した。つい、先月の事だ」

「何か……私と似ているね」

ほんの少し、藤田が笑った。いつもの藤田に戻ろうとしていた。

「……まあな」

俺も少し口元が緩むのが分かった。

「でもさ、何で音楽は続けているの？嫌いだっただんでしょ、英才教育が」

藤田が質問してくる。

何でだろう。それはきっと、音楽の偉大なる力。

「年一回位、ホールを借りてジュニアオーケストラのコンサートに参加させて貰ったんだ。その時の表現している時と、終わった後の余韻、そして観客からの拍手が……俺はたまらなく好きだった」

湧き上がっていた怒りは、いつの間にか消えていた。

「私達も、演奏した後こんな感じになるのかな？」

「さあな」

俺はこれから楽しみになってきた。あの感覚を、もう一度。

1 新人生歓迎会終了後のホールロビーで

大分、学校の雰囲気にも馴染めてきた。入学から一週間経って、一つ分かったことがある。

この学校の生徒は個性的過ぎる。常識の枠を1000m位通り越して。

俺のようなアメリカと日本のハーフで金髪、なんて実はまだ序の口だった。脱走アンドロイドの藤田級な奴らがこの学校にはうじゃうじゃいるのだ。

性格や言動で考えると、藤田さえもまともな方に属する。どんな奴がいるかはここで話すと長くなるし、この後の展開で明らかになるのでここでは言わない。

しかし念のため言っておく。

一応、町立の中学校だ。

さて、今日から仮入部という、1年その他が仮に1日入部する一種のフェスティバルが来週まである。俺と藤田は1年生ながら、吹奏楽部部員として仮に入部する奴らを接待する役であるが……

多すぎる。1年生の人数からすると。

仮入に来た奴ら、ざっと26人。1年生合計、89人。3人に1人ここ。

「新入生歓迎会の発表、そんなにウケたか？」

藤田に聞いてみる。

「うーん……発表は普通だったよね？」

藤田の言う通り、サッカー部やらバスケット部やらは色々とパフォーマンスを見せつけていたが、俺達は別に演奏する訳でも無く、「新しくできる部活です」とか「新しい楽器で隣のホールを使って練習できます」とか「週6回の練習を予定してます」とかといったごくごくありふれた発表だった。

「で、この人数か……あの面倒臭い坂よく上ってまで来たもんだな」

仮入部は基本的に部活動場所で行われるため、吹奏楽部はホールで仮入部が行われる。で、今、前に立つ俺と藤田とその他超個性的メンツの1年はホール内ロビーにいる訳だ。

内装は、なかなかの豪華さで、何か俺達だけで使うのは非常に勿体無く思われる。

「……で、どうすりゃいいの？」と、藤田。

そう言えば、俺達は何も言われていない。先週校長室で話があった時は、

「あ、新入生歓迎会后、仮入部1日目があるからね」

しか言われていない。

ろくに仮入部についての話は全く無かったのだ。

ふざけんなクソ校長。

「えー、皆さんこんにちは」

思えば自動ドアからクソ校長& a m p; 清水先生。

「こんにちは」と、藤田& a m p; 1年。

「ようこそ、吹奏楽部へ。吹奏楽部の仮入部では、楽器体験をします」

何やら書いてあるホワイトボードを引っ張り出すクソ校長。他に従業員とかいないのかよ。

……いるはずねえか。

「このホワイトボードに案内図と体験場所があるので、これを見て自分のやりたい楽器の場所に行って下さい」

おい、それだとトランペットとかフルートとかポピュラーな楽器には行くだろうが、一般にはあまり知られていないユーホニアムとかには誰も来ないだろ。

「部屋には吹き方のプリントがありますが、もし分からなかったら各部屋にある、呼び出しボタンを遠慮なく押して下さい」

どこぞのレストランかここは。

「私か清水先生か前にいるリード君が教えに来ます」

ちよつと待て。勝手に決めるなクソ校長。俺は音楽万能人間じゃない。

……まあ、勉強したから万全だが。

「では、好きな所に移動して体験を始めて下さい」

一斉に移動し始める1年。

「あ、私も行ってくるねー」

どさくさに紛れ逃げる藤田。俺以外誰も気付かず。

そして、クソ校長から何かの機械が手渡された。

「これはどこから呼び出しがあるか分かる機械だ。もし呼び出しがあれば……」

使い方を自慢げな表情で説明するクソ校長に内心滅茶苦茶キレつつも、しっかり話を聞いてやる。

……ただ、まさかここまで吹奏楽部が人気あるなんて正直意外だった。新しくできたばかりの部はさほど人数が集まらないものだと以前担任から聞いたが……

ピピピピピ、と手元の機械が鳴り始めた。本当に遠慮ないな。

「さて、リード君早速仕事だ。チューバの所に行つて来い」

本気で自己中だな……。信頼していると言うかも知れないが、その度を超えていると思うのは俺だけか。

まあ、こんな事思っただけでも時間の無駄だ。結構クソ校長にイラつきながらも俺はチューバの部屋に向かった。

2 チューバと弦バスの部屋で

ここは割と防音もしっかりした所だが、それでもまだ荒削りなチューバの音が部屋の外でも響いてくる。

（この大音量……一体誰が吹いているんだ？）

気になりつつもドアを開けると、そこには一人の超ショートカットの女子が。

そう、女子が。常人外れの肺活量だ。

「お、リードじゃん」

良く見ると、彼女……？ は俺のクラスメイトだった。

何故“彼女……？”としたかというと、彼女と言うべきか、彼と言うべきか迷ったからだ。

彼女……いや、彼？ の事実が明らかになったのは、中学校生活1日目の学活の時に遡る。

――――

「次の人」

新学期お馴染みの自己紹介の時間。男子が終わり、女子の真ん中辺りの時に“彼女”は前に立った。

「えー、名前は、田口瞭たぐちりょうです」

その時、クラスの一部からどよめきが起こった。そして、クスクス笑う声も。

「瞭、もしかして女装してんのか？」

……女装？　こいつ男なのか？

しかし、何一つ不審な点はない。作ったものでは絶対に無かった。声も、女子そのままだった。

「違う！」

彼女は笑いながら反論。

その後、俺は一生の中で初めて、言葉を聞いただけで目眩がする、という現象を体験した。

「今日朝起きたらこうなっちゃったんだよ！！」

—————

つまり、“彼”は女子に性転換をしてしまったのだ。

「じゃ、早速ここ教えてくれよ。この音出ないんだよね」

その証明は、“彼女”の清楚な顔と透き通った高い声、それに反するような“彼”の男口調とその運動神経を根拠にすることである。

「分かったよ」

俺が軽くアドバイスをしてやると、田口はそれを聞いたただけでその音が出た。

「よっしゃ！ サンキュー、リード！」

チューバの横から顔を出し、ピースする田口。

……というかこいつ飲み込み早すぎ。

ピピピピピ……

そんなことを思った時、また手元の機械が鳴り始めた。

「じゃ、俺はここで失礼な」

「おう、困ったらまた呼ぶからな！」

やはり、この声と口調のギャップは満点だ。

「俺が来るとは限らないけどな」

……というか、清水先生はまだしも、クソ校長はしっかり教えているのだろうか……？

次の部屋はコントラバス、通称“弦バス”や“コンバス”。

吹奏楽で唯一用いられる弦楽器だが、人数によっては省略されることもある。

＞うまく弦を押さえられない＜

片方の手でそう書かれたスケッチブックを、もう片方の手で弦バスを持っているのは、ロングヘアーで、赤の円縁眼鏡を掛けた女子。

「……分かった。じゃあちよつと押さええてみて」

すると、こくりと無言で頷き、スケッチブックを水性ペンが置いてあるテーブルに置き、慣れない手つきで弦を押さえた。

その後俺が教えていっても、彼女は一言も喋らず、頷いたりするだけだった。

「よし。じゃあ俺は他の所行くから」

そう言って部屋を出ようとすると、肩を掴まれた。待って、という事らしかった。

彼女はテーブルに置いたスケッチブックに、水性ペンで何やら書いたあと、俺に見せた。

＞ありがとう＜

それだけ、と言えばそれだけ。

でもあるのと無いのでは全然違う。

「どういたしまして。じゃ」

自然と心が暖かくなった。

……でも何で彼女は喋らずにスケッチブックで言葉を伝えたんだ……？

声を聞かせたくない。

いや、ひょっとしたら彼女は……

声を出す事自体出来ないのではないのだろうか。

2 チューバと弦バスの部屋で（後書き）

…ちなみに作者はクラリネットです。

3 ユーホニウムとトランペットの部屋で

次なる呼び出しは、ユーホニウムという楽器の部屋。本当に遠慮がないが、その分みんな上手になりたいという意味が強いんだろう。

ユーホニウムは、いわばチューバのミニ版みたいなもので、チューバがピストンと呼ばれる指を押すパーツが3つなのに対し、ユーホニウムは4つある。そして、温かみのある柔らかい中音域の音が出る。

吹奏楽ではレギュラーな楽器だが、クラシックではあまり使われていなく、世間一般の知名度も低い。しかし、ムソルグスキの“展覧会の絵”の管弦楽版ではソロがある。

前にも言った事だが、クソ校長は案内図とその部屋で出来る楽器の名前しか書いて無かった。

知名度が低めなユーホニウムに来る奴はきっと好奇心旺盛な変わり者だろうと思うが……

コンコン、とノックして扉を開ける。

そこには、やや茶色がかったロングヘアーの女子が1人俺に背を向けて座って、まだおぼつかない音色でユーホニウムを吹いていた。

ただし、音程と音色こそ悪いが大体の音は外さず、基礎練習のための楽譜をすでに指定のテンポで吹きこなしている。

……こいつ将来、連符のエースになるな。

「……あ」

向こうが俺に気づいて、座ったまま顔を向けた。大人しそうな印象の、小さめな顔。好奇心旺盛とは思えない。

「ありがとうございます、来てくれて……」

とても小さく、弱々しい声。よく俺を呼び出す事ができたものだ、と思った。

「ああ。で……どういうご用だ？」

「ええと……音色をもっと良くしたいのですが、どのようにすればいいんですか？」

この質問も入門者には珍しい。大抵入門者が聞いてくるのは音が出ないか、指が動かないかの2つ程度だろう。

きっと別の楽器をやっていたか、それとも親が楽器経験者などなのか。

ただ音色はそう簡単に良くできるものではない。ある程度は一瞬で良くすることができが、最高の音色を出すためには結構な時間が掛かる。

彼女にそれを伝えた上で、今すぐにでもある程度音色を変えられるようなアドバイスをした。

すぐに良くなった訳では無いが、ロングトーン（音を伸ばす練習）をする内に音色が良くなっていき、ついでに音程も正確に近くなってきた。

「ありがとうございます、じゃあ私、音色研究してみますね」

俺に礼を言った後、彼女は再びロングトーンを始めた。

努力家だな……俺もこの位努力したと思うが、ここまで一人で努力出来るのか？

俺は彼女の音色が広がる部屋を後にした。

……この時、俺はまだ彼女の過去を知らなかった。

酷くのしかかる彼女の過去を……

――――

トランペットには、4人の体験者がいた。ざっと言うと……

短髪で少し日焼けした、車椅子の男子。

身長がとても小さい（約130cm）、短いツインテールの女子。

赤いメガネを掛けやや色白い、黒髪でボブヘアの女子。

何の特徴も無い男子。

その内、俺を呼び出したのは小さい女子だった。

「高いドの音が出ません」

驚いたのはその声。

本気で大人の女性ボイス。

「あ……ああ、高いドか」

若干表に狼狽しているさまが出てしまったが、あまり気づいていないようだ。

聞くと、どうやらコイツだけドが出ないらしい。

しかし、俺が適当なアドバイスをしてやると、一発でその音が真っ直ぐ出た。

「お、すげえ」

車椅子の男子が感嘆の声。

……俺ってもしかしたら教えるの上手い？

「ありがと、リード君」

大人女性ボイスで礼を言う130cm少女。

思わず敬語使いそうになるじゃねえか。

「じゃ、俺は次の所行くからな」

――――

トランペットの部屋を後にし、次の目的地であるフルートの部屋に行く。

その途中、ふと思った事があった。

なんでだろうか。

この中学校の生徒は、俺の事を誰も隔てようとしなない。

逆に気持ちが悪い。

俺は慣れていたのか。人から侮辱される事に……

ただ、俺は侮辱される事は嫌だ。

でも、何か違和感を感じる。

訳が分からない。

俺は侮辱されたいのか？

それともされたくないのか？

時間が来て仮入部が終了になっても、この良く分からない感情は複雑に交錯し続けた。

4 仮入部4日目のユーホニウムの部屋で

仮入部4日目。次第に見かける顔が固定化されてきた。もう大体の奴は入る部活の見当はついていっているらしい。

今日の吹奏楽部の仮入部人数は17人。さすがに1年の3分の2がここに入ったら他の部活は廃部ロードまっしぐらになるからな。

で……俺はまだこの学校の環境に慣れない。

奇なる外見を侮辱される事が当たり前だった昔。

俺は早く抜け出したいと思い続けていた。

差別偏見がなく、それぞれの強烈過ぎる個性を尊重し合える今。

俺は何故か気分が悪いと思っている。

慣れない環境に放り出されたら、そこがどんな楽園であっても落ち着かないだろう。

ただ……新たな環境に置かれて一週間以上経ってのこの状態は、異常だと自覚している。

慣れるしか無いだろうな……。分かっているけれども。

ピピピピピ、と鳴り響く機械。見ると、“ユーホ”の表示。

……久しぶりだな、呼び出しは。

俺はユーホニウムの部屋に向かった。

――――

相変わらず、彼女は練習ばかりしていた。

仮入部始まって以来、この部屋には決まって彼女しかいない。

クソ校長のせいかな。はたまた彼女のひたむき過ぎる練習姿勢がその場に居づらくさせてしまうのだろうか。

ただ、彼女はいつも孤独だった。それは、自ら孤独でありたいと思っているかのようにも見えた。

「……リードですか？」

相変わらずの敬語。まるで距離を取るかのように。

「ああ。何の用だ？」

「えっと……」うつむき、なかなか言い出せない様子の彼女。

顔色は変化していない。つまり……

……藤田パターンか？

今度は一体何者だ……？

「早く言え。他の所行くぞ」という台詞を飲み込み、彼女の続きを待った。

……が、3分程経過しても彼女の口は動かない。

どうせだ。俺の愚痴も聞いて貰おうか。こういう奴は、先に自分がオープンにならないと心開いてくれないからな。

「なあ、先に俺の愚痴聞いて貰っていいか？」

おそらく虚を突かれたのだろう、彼女はしばらく固まった。

そして、うつむいたまま小さく頷いた。

それを確認してから、俺は分からない感情を、静かに話した。

――――――――――

「……もしかして、泣きたくないんじゃないですか？」

しばらくして聞こえた彼女の小さな声が、心に染み渡る。

「変に、侮辱に対する免疫を維持しよう、維持しよう、ってなっているんじゃないですか？」

「……分からない」

素直な答えが、これだった。正直、原因なんて分からない。分

かるはずの無いものなのだ。

ただ……

「……そういうものなんです。分からないんです、本当の原因なんて。でも、嘘の原因だとしても、自分に思い込ませれば、本当の原因になるんです」

彼女の言っている事が、正しく思えてきた。

「……そうだな。解決できれば、原因なんて関係ない」

「……はい」

俺の気分の悪さが、気付くと無くなっていた。

「……でも、私のような者を除いて、ですけど」

しかし……彼女は違った。

俺みたいな可愛い悩みではなく、長きに渡る大きな悩み……いや、苦しみがあった。

「今いる私は、本当は消えるべき存在、偽りの存在なんです。いわば……二重人格です」

二重人格。そして今の彼女は偽りの人間。本来いるべきでない……

「二重人格は通常、お互いに自覚は無いのです。が、私はどうやらかなり特別な偽りの人間らしくて……」

元の彼女は、3年前に両親を殺された。

そして……全ての人が私を殺そうとしているという妄想に陥り、その苦しみから逃れる為に今の彼女……俺の目の前にいる人格を形成したらしい。

「そんなこと、私が知り得る事では無いんです。それに、私が偽りであり、消えたいと願っている事も普通は有り得ないんです」

「じゃあ何でお前は知っているんだ？」

そう言った後、こんな質問するんじゃないかと後悔した。

が、彼女はこう言った。

「……神からのお告げです。私が生まれる前に、こう言われました。

“この子を助ける。この子が元に戻らねば、世界は崩壊する”」

一体……？

「……私も意味が分かりませんでした。今も分かりません。けれど……」

ホールに、部活終了を知らせるチャイムが響いた。

「……すみません、つい長く話してしまっ……」

「いや、俺はお前に感謝している。お前のお陰で気分が晴れた」

「いえ……私ではなく、元の彼女の心です」

4 仮入部4日目のユーホニウムの部屋で（後書き）

D S i 文字数制限のせいで結構半端な終わり方に……すみません。

5 本入部の日の教室とホールで

部活フェスティバル（勝手に命名）こと仮入部が昨日で終了した。つまり、今日から本入部。部員の数も今日判明する。

厄介なのは、その部員数によって吹奏楽部の方向性が変わる事だ。吹奏楽に限らず音楽は、その演奏者の数によってジャンル自体異なってくる。

同じ吹奏楽でも、人数が8人位までなら＞アンサンブルくという指揮無しの少人数合奏になるし、それより少し多いと＞少人数編成吹奏楽くというものに、もっと多いと＞吹奏楽くになる。

少人数だと、意外に演奏できない楽曲も多いし、逆にそれ向けに書かれた楽曲もあるから、人数だけとっても結構幅広い。

ま、仮入部のペースだと少人数吹奏楽編成になりそうだな。

ということで少人数編成の時のパート編成を今考えている所だ。

「おい、リード！」

「……人が考え事している時に話し掛けるな」

話し掛けてきた奴は藤田ではなく、“元”男子、“今”は女子の
田口瞭。
たぐちりょう

こいつデリカシー本当ないからな。

ちなみに、只今昼休み。その後5時間目、帰学活とあって部活になる。意外に長いものだ。

「今日から本入部だよな？」

話し掛けんな、という拒否意思を無視して自分のペースに引き込もうとする田口。

「……」

タダで引き込まれる訳にはいかないので、無視する俺。

「どんぐらい入ってきそうか？ 新入部員」

無視すら無視して喋る田口。

「……」

無視を無視されても無視する俺。

「なあ、教えてくれよ」

無視を無視した後の無視すら無視する田口。

「……」

無視を2度も無視されても無視する俺。

「……ZZZ」

無視されて腹が立ったのか田口は立ったまま寝た。

……立ったまま!?

周囲を見渡すと、後ろに藤田がこちらに笑ってピースを送っていた。

「なんか困ってそうだったからさ、眠らせた」

そういえばあの時も、暴力団共を眠らせたのか?

「サンキュー、藤田」

俺は苦笑いが止まらなかった。

――――

ホールへ向かう坂道。意外と人数多い……?

いや、普通に帰る部活無い方々もいらっしやるので……

てか前の女子集団どっさり左のホールの敷地に入っていた……
!!

……くそ……昼休み考えていたパート構造練り直しじゃねえか……。

そして、部員数判明。

ホールで待っていたクソ校長が俺に告げた人数は……

「56人この部に入ってきたぞ……！ ワタクシは感激だ……！」

……幾ら何でも多過ぎだろ……。

というか他の部壊滅状態だろ絶対……（1年生は89人）

「とにかく！ リード君に藤田さん！ あなた方のお陰だ……！！」

感動して泣いているのも正直醜いが……他の部の凋落を見捨てるのか……？

「……清水先生。とりあえず時間が勿体無いのでオリエンテーションを始めましょう」

「はい」

退屈させる時間は無駄だ。とつと説明して楽器決めの活動に進めよう。

パンパンパンパン、と手を鳴らす音が響いた。すると、田口を中心とした喋り声は直ぐに止んだ。

「これからオリエンテーションをするので、こっちに来て下さい」

はい、と威勢のいい返事が返って来た。

……最初から立派な返事ができる。これは全体として相当なスキルが期待できる前触れか……？

6 オリエンテーション後のホールロビーで

オリエンテーションは、清水先生と俺が中心となって、練習の日程や発表会？コンクールについて、清水先生が考えてきたという部活の規則などを話した。

で……その後自己紹介があったのだが、その時間が長過ぎる。全部書くとこれだけで5話は書いてしまうため、ここには俺を含めた部員全員の名前と希望パートを記す。

指揮者..

エルウエリア？リード

フルート（ピッコロ）..

旭川 あさひかわ ヒカル

富岡 とみおか やよい

西条 さいじょう 萌 めぐみ

日高 ひだか 蛍 けい

木更津 きさらづ 遥 はるか

鈴木 すずき 深沙 みさ

王 おう 理恵 りえ

藤原 ふじわら こころ

小松原 こまつばら 雫 しずく

オーボエ（イングリッシュホルン、バスーン）..

坂本 さかもと 滯 みお

木下 きのした ちひろ

クラリネット（アルトクラリネット、バスクラリネット、コント
ラバスクラリネット）..

三沢 みさわ 弥生 やよい

大宮 おおみや 希 のぞみ

野島 のじま ノエル

長宗我部 ちようそかべ 芹華 せりか

霧村 きりむら 久美子 くみこ

斉藤 さいとう 藍 あい

サククス（ソプラノ、アルト、テナー、バリトン）..

木村 きむら 香 かおる

柴田 しばた
冬樹 ふゆき

牛沼 うしぬま
莉子 りこ

上野 うえの
さくら

日立 ひたち
麗花 れいか

吉田 よしだ
七七七 ななみ

川口 かわぐち
玲実 れみ

大島 おおしま
恵 けい

古田 ふるた
蕾 つぼみ

トランペット（ピッコロトランペット、フリューゲルホルン）
..

藤田 ふじた
流音 るおん

河合 かわい
龍王 りゅうおう

森本 もりもと
さやか

佐藤 さとう
恵美 えみ

三村 みむら
福 さち

横山 よこやま
咲 さき

上下じょうげ
空そら

トロンボーン（バストロンボーン）
..

平澤ひらさわ
勇氣ゆうき

奥田おくだ
苑その

山本やまもと
桃もも

並木なみき
京子きょうこ

新田にいだ
苺まい

中村なかむら
明璃洲ありす

ホルン..

山田やまだ
一郎いちろう

神田かんだ
いつき

野田のだ
絵里えり

加賀見かがみ
瑞みずき

本田ほんだ
鈴音すずね

ユーホニウム..

功德林くどりん
李すもも

チューバ..

田口 瞭 たぐち りょう
白川 雪 しらかわ せつ

コントラバス（エレクトリックベース）..

滝 たき
みく

パーカッション..

佐々木 碧 ささき みどり

寺田 みかん てらだ

尾崎 弘夢 おさき ひろむ

石井 梢 いしい ことえ

未定..

後藤 実琉 ごとう みる

黒澤 菜々（なな） くろさわ

伊藤 晴美 いとう はるみ

二宮 和湖 にのみや わこ

織田 亜希子
おだ あきこ

尚、パートの横にある○内の楽器は、その楽器を掛け持つ、または専らその楽器を担当する事になる可能性のあるものである。

……こうして見ると、圧倒的に女子の比率が大きいのが分かる。部活の掛け持ちは認められていないため、女子運動部は大丈夫かどうか非常に心配だ。

また、パートにも偏りが見られる。フルートやサクソ、トランペットなどの希望者数は非常に多いが、クラリネット、チューバ、コントラバス、ユーホニウムはかなり少ない。チューバはこの位でも十分だが（田口を考慮して）、コントラバスはあと1人位欲しくて、ユーホに至ってはまだまだ足りていないという状況である。

未定の奴をぶち込んでも仕方ないし……

「リード君……君に相談があるの」

そんな事を考えながら、灰色のバインダーに挟まれた名簿を見ていた俺に、清水先生が横から話し掛けてきた。

表情が、真剣だ。

「何ですか？」

パート分け？

それとも他の部との兼ね合いについて？

「……ここだと騒がしいし、別の所に行って相談しましょ」

6 オリエンテーション後のホールロビーで（後書き）

またしても中途半端に……文字数……。

細かい登場人物紹介の方は、別の小説として、ちよくちよく更新する予定です。

……はい。全員恐ろしく個性的です。

7 第二会議室で

俺は、名簿を片手に持った清水先生に、誰もいない部屋に連れられた。

「……じゃ、早速」

先生は藤田や田口みたいに色々ある訳ではないだろうから、来る前に思ったことを話すのだろうと思った。

……しかし、先生も“アレ”だった……。

「最初に言っておくけど、これから言うことは全て事実なの。……私の見た未来は間違いないから」

……私が見た未来？

「先生、“私の見た未来”って……？」

「あ、言っていなかったっけ？ 私、一応未来を見通せる力があるから」

本当か……？ 昔の俺なら胡散臭くて絶対信用するはず無いのだが、アンドロイドやら性転換者やら神からのお告げを聞いた二重人格者やらと、とんでもない奴らに会った今の俺にとっては、半信半疑というレベルだ。

そりゃ、約2週間の内に世界が180度回るような、衝撃的事実が何回も告白されると精神もおかしくなるだろ。

「ま、そういう事だから。とにかく、これから私の言う事を信じて」とりあえず、今回は信じる方向で。信じないと、もし予言が的中したとき確実にパニックに陥る為。

「……分かりました」

俺は口先で同意の意思表示をする。

「ありがとう、話が早いわ」

清水先生は一瞬だけ微笑んだが、すぐにまた真剣な表情に戻り、“未来”を話し始めた。

「先に結論を言うと……キミ達が2年生の時に、とある機関との間に戦争が起こる」

機関……？ 戦争……？

「……戦争って……世界大戦みたいなものですか……？」

「ううん、違うわ。紛争……かな？」

「俺達と……では無いですよね？」

俺は、戦争だろうが紛争だろうが他人事（たにんじ）であって欲しかった。

……しかし。

「ううん。この吹奏楽部と、とある機関の間での紛争よ」

嘘だろ……？

呆氣に取られた俺を見てか、先生は、

「ただ、安心して。実は入部してきた部員達には、機関を遥かに凌駕する戦闘能力を持つ部員が大勢いるわ」と。

藤田その他の奴の事か。つまり……？

「機関に勝てる、という事ですか……？」

すると、先生は、

「ええ。きっと勝てるわ」

とあっさり肯定した。

ただ、表情は陰しさを見せていた。

そしてその事は、付け加えとして話された。

「……ただ。下手すれば誰か殺されてしまうわ。相当なミスを犯した場合だけどね」

殺される。

……自分が。仲間が。

「私はこの事態を回避するよう努めるけど……正直かなり厳しそうかな……」

「そうですか……そんな事……」

ぶっちゃけ、絶対に信じたくない。

だが、俺はこの予言を信じて、この来るべきして来る時が来るという覚悟をしなくてはならない。

もし信じずに、1年後に本当に紛争が起これば、俺は確実に焦る。……そうなればきっと、生き残れるはずの奴も殺されるかもしれない。

……それにしろ。

今の日常は、普通の日常から本気でかけ離れている。

……俺は普通の平穏な日常の元育ってきた。ただ、今はその人生12年の経験上有り得ないという事が次々と起こっている。

……これは神の仕組んだものか……？

「……リード君？」

清水先生の声で我に返る。

「とにかく、1年後にこういう事が起こるかもしれないという事、頭に入れておいて。……絶対にね」

「……はい」

俺は低いトーンで同意した。

「……さて、私達は教えに行かないとね」

先生の表情が明るいものになる。まるで今までの話が無かったかのように。

「はい」

制服のポケットの中にある、クソ校長自慢の機械を取り出し、呼び出しを確認してみると、そこには“チューバ”の文字がずらりと並んでいた。

というか、現在進行形で増殖中だ。

「……あいつ、本当にデリカシーねえな」

そう呟いてから、俺は清水先生にチューバの部屋に行ってきます、と告げ今いる部屋を後にした。

……仕方ねえな、行つてやるか。

心の中でそう呟く自分がいた。

8 部活終了後の自宅

……俺は音楽をやる為、ここに入ってやったんだろ？

なのにいきなり紛争だ……？

殺風景なワンルーム。大きめな窓の外は砂利敷きの駐車場、それを挟み隔たりの無い所に赤の他人の一軒家。

今日の部活自体は、結構充実していた。

田口はB♭-dur（ピアノのシ♭から始まる、長調）の音階がある程度出来るようになったし、藤田もトランペットに少しずつ慣れていっているし、その他の奴も着実にパートが定まりつつある。

ただ……まさか、あんな事を言われるとは。

違う。あんな事を予言されたとは。

……何故、俺は中学生になって早々に、こんな状況に立たされるのか。

きっと、清水先生の発言は嘘じゃない。あの表情は本物だった。絶対。

ただ、その言葉は俺の心情をぐらつかせるのには十分過ぎる威力

を持っていた。

こういう時、昔の俺が羨ましくなる。軽く受け流して終わり、だろ？

しかし、人ってのは一週間で変わるもんなんだな。奇妙な奴らと出会って、俺の現実主義の価値観が大分変わった。

……そのせいで、果たしてこの先吹部にいるべきなのか悩んでいる。

俺は戦いをやる為ここに入部したんじゃないぞ……

木でできた、古びた天井を見上げる。すると不意に、ここに来た時の事が思い出された。

――――

俺が大家さんに拾われて、このアパートに初めて来た日の事だ。

「いいんですか、俺なんかがこんないい部屋で……」

「平気だ。ぜーんぶ同じだからな」

そう言って、ガッハッハと豪快に笑うここのアパートの大家さん。

その名も家持貸造いえもちかしぞうという。50代位の日焼けした、常にタンクトップの豪快おじさんだ。

特徴的な名前だが、俺は大家さんと呼ばせて頂いている。

「リード、とか言ったか？」

大家さんは白い歯を見せて、言った。

「はい」

……この後の大家さんの台詞が、俺は忘れられない。

「この町にはな、ちょーつと変な奴が多いけどさ、お前ならやっていけるさ。力を合わせりゃ向かう所敵無しだからな！」

――――

力合わせれば無敵。今恐れたら駄目だ。

紛争は1年後。それまでにも演奏できる機会は絶対あるだろう。

まず、6月の西部地区研究発表会。7月には近くの小学校で依頼演奏。

そして、8月にはコンクール地区予選がある。ただ出るかどうかは今の所未定だ。

これから4ヵ月だけでも2つないし3つある。

今は良い演奏ができるように、部員の育成に集中しよう。

その時が来れば来たで……俺も共に戦う。

知らず知らずの内に握っていた右手を開き、天井を向いていた視線も普段通り真っ直ぐ前に戻した。

目の前の物事をどう片付けるかに集中するんだ。逃げな。

俺は部長だ。

9 本人部一週間後の朝の通学路で（前書き）

パートの割り当てですが、につくん♪先生から許可を頂き、“奏
（K a n a d e）”を参考にさせて頂きました。

につくん♪先生、ありがとうございました。

9 本入部一週間後の朝の通学路で

本入部から一週間経った今日、パートを確定させた。昨日徹夜して悩んだ末の結果だ。

指揮者..

エルウエリア?リード

ピツコロ(1) ..

旭川 あさひかわ
ヒカル

フルート(3) ..

王 おう
理恵 りえ

富岡 とみおか
やよい

藤原 ふじわら
こころ

オーボエ(2) ..

小松原 こまつばら
雫 しずく

木下 きのした
ちひろ

バスーン(2) ..

坂本 滯
さかもと みお

吉田 七七七
よしだ ななみ

クラリネット（10、その内1人エスクラリネットと持ち替え）..

三沢 弥生
みさわ やよい

野島 ノエル
のじま

大宮 希
おおみや のぞみ

霧村 久美子
きりむら くみこ

斉藤 藍
さいとう あい

西条 萌
さいじょう めぐみ

日高 蛍
ひだか けい

木更津 遥
きさらづ はるか

鈴木 深沙
すずき みささ

アルトクラリネット（1）..

伊藤 晴美
いとう はるみ

バスクラリネット（1）..

川口 玲実 かわぐち れみ

コントラバスクラリネット(1) ..

長宗我部 芹華 ちようそかべ せりか

アルトサキソフォン(3、その内1人ソプラノサキソフォンと持ち替え) ..

上野 さくら うえの さくら

古田 蕾 ふるた つぼみ

大島 恵 おおしま けい

テナーサキソフォン(2) ..

日立 麗花 ひたち れいか

木村 香 きむら かおる

バリトンサキソフォン(2) ..

牛沼 莉子 うしぬま りこ

柴田 冬樹 しばた ふゆき

トランペット(6) ..

藤田 流音 ふじた るおん

河合かわい
龍王りゅうおう

上下じょうげ
空そら

三村みむら
福さち

横山よこやま
咲さき

森本もりもと
さやか

ホルン
(6)
..

神田かんだ
いつき

本田ほんだ
鈴音すずね

山田やまだ
一郎いちろう

加賀見かがみ
瑞みずき

野田のだ
絵里えり

テナートロンボーン
(4)
..

山本やまもと
桃もも

奥田おくだ
苑その

中村なかむら
明璃洲ありす

新田 にいだ
 苺 まい

バストロンボーン(1)
 ..

平澤 ひらさわ
 勇気 ゆうき

ユーホニウム(2)
 ..

功德林 くどり
 李 すもも

二宮 にのみや
 和湖 わこ

チューバ(2)
 ..

田口 たぐち
 瞭 りょう

白川 しらかわ
 雪 せつ

コントラバス(2)
 ..

滝 たき
 みく

佐藤 さとう
 恵美 えみ

パーカッション(6)
 ..

佐々木 ささき
 碧 みどり

寺田 てらだ
 みかん

尾崎 おざき 弘夢 ひろむ

石井 いしい 梢 こずえ

後藤 ごとう 実琉 みる

黒澤 くろさわ 菜々 なな (なな)

このようになっていく。基本的には希望と同じパートではあるが、フルートなど希望者の多過ぎるパートは一部別のパートに移動させてある。

このパート割り当てで一番悩んだのは、ユーホニウムとコントラバスだ。

二重人格で全ての人間を怖がっているという功德林と、全く声を出さない滝。

この2人のパートナーとなる人物は2人の将来にも関わってくる、といっても過言ではない程重要だ。

その為、その2人については藤田と清水先生で話し合った上で、本人に直接話しに行き、覚悟があるかどうかを聞いた。

結果、一番最初に話しに行った2人で快諾してくれた。

まだ、学校が始まって最初の1ヶ月も終わっていない。なのにこの仲間意識の強さ……なんだろうか。

とにかく、そういうような物が強い。

これを、今日の部活の冒頭で発表する。果たして、どんな反応が返ってくるか……？

9 本人部一週間後の朝の通学路で（後書き）

これで、N O . 2 完結です。

1 パート練の時のチューバの部屋で

時は流れ、5月7日。

俺達吹奏楽部は、無謀にも6月の“西部支部吹奏楽研究発表会”にて演奏することになった。

これは4回に分けて（6月5日、12日、18日、25日）開催されるらしいが、最悪1カ月経たずに本番が来る。逆に最も遅いと2カ月弱の猶予がある。

でも……これは上手い演奏をすることが真の目的ではない。

本番への慣れだ。

コンクールBの部に出場する事が固まりつつある今、本番のプレッシャーへの慣れはとても重要だ。これが終わると、次にちゃんとしたホールで演奏するのは、コンクールとなってしまふ。

ま、それに向け今は、

○基礎を固める（3Dバンドブックを利用）

○西部支部用の曲「ブラック？ホークの舞うところ」の譜読み及び練習

をやっている。どちらかというと、現時点では基礎の方が優先だ。コンクールの曲は只今清水先生と検討中だ。楽器を持ってまだ4

カ月も経たない内にコンクールに出るのだ、どの位のレベルの曲が
相応しいか悩む所だ。

ま、現状報告はそこら辺にするか。

今はパート練習中。俺は暇……では無かった。

鳴り響く、腰につけた例の受信機。

見ると決まってチューバチューバチューバ……そして現
在も増殖中。

……田口、抑えろ。

そう心の中で注意を促し、チューバパートに割り振られた部屋に
入る。

「おっす！ 早速こっち来い！」

相変わらずのうるさく高い声。

「……うるさい」

そして、こいつも相変わらずと言えば相変わらずだ。

彼の名前は白川雪^{しらかわせつ}。俺以上に冷めた、無口な男子だ。

何故だか、2人は幼稚園時代からの大親友らしい。

……どこをどうしたら気が合うんだ……？

改めてこんな疑問を持ちながら、俺は田口の方へ。

白川の方は以後、黙々とロングトーンをしていた。初心者にしては大分いい音色だ。

「リップスラーが上手くできねえんだよ……！」

……そんなに叫ばなくても聞こえる。

リップスラーとは、主に金管楽器で、指を動かさず、唇の形だけを変えて音を変えるテクニクの事だ。金管楽器で曲を吹くためには必須。

「……とりあえず、音出して」

「OK」

田口が大きく息を吸った時。

バンツと勢い良く、部屋の防音ドアが開いた。

「白川！ 大変なの……！ ……あと、リードも！」

開けたのは、ユーホニウムの二宮^{にのみやわこ}和湖だ。かなり焦っている様子。

「……何の用だ？」

白川は動じる事無く聞く。その隣の田口は、キョトンとした顔

だ。

「李^{すもも}が……李がどこか行っちゃったの!!」

「な……なんだってえ!？」

驚きの声を上げたのは田口だ。

もしや……表の人嫌いという性格が出たのか……？

ただ、ここは俺が入るべき会話ではない。

「……先生には伝えたか？」

「うん、今さっき伝えた。だからもうすぐ集合が……」

すると、ピーンポーンポーン、という音が天井から聞こえた。

「吹奏楽部員の皆さん、楽器を置いて、至急ロビーに来てください。もう一度繰り返しします。吹奏楽部員の皆さん……」

「……行こう」

白川は放送が鳴り終わらない内に、部屋の外に出た。

俺も白川に続く。

「……っーか待てよ!!」

田口も俺に続く。

最近そう言えば功德林くどりんの様子がやや不自然だったな……

『おい、何だ?』

『……』

『……何の用だよ?』

『……あ、ごめんなさい……』

彼女の精神状態がこれで戻ればいいのだが……。

もし、本当の彼女が戻っているなら、今が解放のチャンスだな。

というか、今しかないと思うぞ……。

「……二宮」

白川から話しかけるのは珍しい。

「な、何?」

「あいつを助けられるのはお前しかいない。分かったか」

「う……うん」

二宮は戸惑っている。が、白川の言っている事は正しい。

清水先生が「和湖ちゃんしかない！」と言っていた。俺には根拠が分からないが……。

ただ、会って話をした際に、こいつならやってくれるだろうと思っただのだ。

元の功德林を呼び戻せる事ができるだろう、と。

「やべえよ、もう結構集まってんじゃん」

ロビーには既に部員の大半がパーティーごとに整列していた。急な召集でややざわめいている。

さて……先に伝えておくべきか……？

……いや、混乱を招いて終わりだろう、きっと。

俺は前に立つのみで、清水先生が来るのを待った。

2 集会後の廊下で（前書き）

更新が遅れてすみませんでした。今後の展開で悩んでいたの…
…

2 集会後の廊下で

功德林捜査部隊には、二宮と白川が指名された。白川が指名された理由については、千里眼の持ち主であるからだ。2人にはトランシーバー的な物を持たせて通信できるようにするとの事だ。

で、残された俺達が伝えられた事は、二宮達が功德林を見つけたら、全員で迎えに出る旨の放送をするので、頭の中に入れておきたいなものだった。

……ま、ここは俺が出る幕ではないしな。あいつらならきつとやってくれるはずだ。

緊急集会が終わると、再びパート練習となった。ほぼ全員が初心者というバンドなのだから、時間は一切無駄に出来ない。

部員の気分的にもあまりに呼び出しは来ないだろうと思ったが、それは単なる思い込みだったようだ。

早速表示された“フルート”の文字。部屋に向かう。

功德林、無事見つかってくれ……

俺らしくもない事を思いながら。

2 集会後の廊下で（後書き）

なぜ今回は異常な程短いかというと……視点変更です。次回二宮和湖視点となる予定。

3 大きめな倉庫の中で

「ここ……?」

私たちが着いた所は、なんと大きめな倉庫だった。鉄でできた倉庫は、所々錆びていて不気味な雰囲気醸している。白川によると、李はここにいらっしゃるらしい。

「ここは危険だ。とりあえずお前は外のどこかに隠れていろ」

相変わらず冷淡な口調の白川。

「何で?」

「……とにかく危険だからだ」

そう言うと、白川はトランシーバーに何か言って、1人薄暗い倉庫へ入って行った。

……私だって弱くなんかないもん。

私も後を追って倉庫の中に入った。

薄暗くホコリ臭い空っぽの倉庫。中には李とは違う、がたいの良い男が数人見えた。

「なんだお前?」

その中の1人であろう男の低い声が響く。

そう、李は拉致されていた。

「お前らが捕らえた奴を解放しろ」

白川はいつもと変わらない口調で言い放つ。すると、まるで私たちを軽蔑しているかのような男の笑い声が響いた。

「何言ってるんだ？ 俺らはそんなん知らねえぞ？」

「なら、武力行使だ」

白川は近くにいた男の腹部に、助走をつけて強烈な飛び蹴りを食らわせた。男は6 m位吹き飛ばされ、壁に打ち付けられて気を失った。

すると男は、

「バレちゃ仕方ねえ！ 全員出てこい！！」

やはり……だったのか。

どこに隠れていたのか、大勢の男が一斉に飛び出し、私たちを囲んだ。あんなにいたなんて……！

しかし、白川は動じない。

「おい、外で隠れてろ、って言っただろ」

「こんな大勢で大丈夫なの？ 私にも手伝わせて」

「この位一掃できる」

白川は余裕の無表情で、どこからか取り出した白いブーメランを投げた。ブーメランは白い軌道を描き、面白いように男たちに命中し凄まじい勢いで吹っ飛ばしていく。

「お嬢ちゃん、お前も消してあげようか？」

後ろから声。振り向くと既に目の前に金属バットが振り下ろされてきた。……知ってたけど。

ギリギリでステップを踏んでよけ、隙だらけの所を肩で思いっきりぶつかる。ちゃっかりもう一人巻き添えにしてやった。

白川は白川でブーメランの残しを3人程度片付けた。つまり私と白川が直接倒しにいったやつら以外は、みんな白川のブーメランで吹き飛ばされた。精度もなかなかすごいな。

「余計な事するな」

相変わらず白川は冷たい。

「でも、私も李を助けない。だって李は……」

「分かった。今は目の前に集中しろ」

本当に分かってくれたかどうかは知らないけれど、私の参加を認めてくれたのは嬉しかった。

白川の言葉通り前を見ると、他の男より一回りも二回りも大きい、金髪の男が手をゴキゴキと鳴らしながらこちらに迫ってきた。

「ほう、仲間になって欲しい位の能力だ。ただ、俺としてもお前達を生きて帰す訳にはいかないからな。残念だが、消えてもらう」

低い声が響いた後、金髪の大男はこちらに向かって殴りあわんと走ってきた。重く鈍い地面の振動が、かすかながら伝わってくる。

「……見かけ倒しが」

動じる事なくただ突っ立つ白川。私は白川の斜め後ろにいて、いつでも問題ない構えだった。

「どりゃあっ!!」

大男は不意に白川の手前で一回転し、裏拳を放ってきた。

白川くんっ……!!?

ただ、私の一瞬の心配は杞憂だった。それをいとも簡単に受け止めて受け流し、大男がバランスを崩した隙に後頭部辺りに回し蹴りを浴びせた。

大男は一つよろけて倒れこんだ。白川は、私に横目を向け言ってきた。

「……とどめを刺せ。起き上がったら厄介事になる」

かわいそうとも思ったけど、李を拉致して私達を殺そうとしたや

つだ。

「……分かった」

私は起き上がろうともがく大男の顔面を、運動靴の裏で思いっきり踏み潰した。

3 大きめな倉庫の中で（後書き）

……吹奏楽関係なくなってますね。でも最終話は吹奏楽で終わるので、この小説の行く末は心配しないで下さい！！

4 暗い倉庫の片隅で

李は倉庫の奥にいた。体は縄で柱に固定させられ、手と足も縛られ、口には布巾で声が出せないようにされていた。

「俺は出口で待つ。お前が説得しろ」

「あ、ちょっと……」

白川は抑揚のない口調で私にそう告げたあと、すぐに出口から漏れ出す光の中に消えていった。

仕事放棄なのそれ？ っと思いつながらも、私は幼い子供のように恐怖に怯え、目に涙を湛えている李の方へ、ゆっくり近づいていた。

今、きっと李の脳裏には昔の忌まわしい記憶が取りついているのだろう。彼女が人間不信になった原因となる記憶が。

私は一定の距離の所で立ち止まり、李の目を見る。

「安心して。私、何も悪い事しない」

ここで、絶対に“李”と言ったりしてはいけないんだ。本当の李は両親が殺された時の記憶で止まっていて、私の顔を知らないからだ、と前に“もう一人の”李に言われた。もしも、という事で伝えられた事だったけど、こうも早くその時が来るなんて……。

「ころさ……ないの？」

どこかつたない感じの言葉。でもその言葉には、私に対する計り知れない怖さが感じられた。

なぜ白川が逃げたのか、分かった気がした。

「うん。だから……」

どうする？ 言葉の続きが……

「一緒に行こう」なんて言ったりすると絶対に逃げる。でも、私は李を連れて帰らないといけないんだ。

だめだ、いい言葉が思い付かない。

不意に、李が口を開いた。

「……お姉ちゃんなら、信じられる気がする」

それは確かに聞こえた。はっきり聞こえた。李にとって初対面である私を、なんと李は信用しようとしている。

「本当……?」

「うん!」

これならもう、心配いらない。

「じゃあ、私についてって。私の仲間達に会いに行こ?」

「お姉ちゃんの仲間も、お姉ちゃんみたいに優しいの？」

「うん！」

私は李の手をしっかりと握り、光の見える方に向かった。

その時、私は会ってから初めて李の笑った顔を見た。とても、純粹で汚れない笑顔だった。

真っ暗な倉庫を出ると、白川が待っていた。

「うまくいったな。まさかこんな短時間に説得できるなんて、お前の力も伊達じゃないな」

「私の力……？」

確かに深い傷を負い、更に幼い子供のままの精神であった李の説得には、もっと時間がかかりそうなものだ。

それに、私の隣ではしゃいでいる李のなつき具合も異常なのでは？

でも、その理由が私……？

「さ、帰るぞ」

「あ……うん」

白川はトランシーバーで李の説得に成功した旨を報告すると、さ

っさと私の前方を歩き出した。私も、隣にいる李の手をしっかりと繋ぎ、他の部員の待つホールへ向かった。

李の笑顔は、ずっと絶えなかった。

5 部員全員が集まるホール前で

ホールに帰ってくると、私達が出かける前に清水先生が言った通り、部員全員が出迎えてくれた。

李は怖がる様子を見せず、純粋な笑顔を見せていた。が、急に足元がふらついて倒れそうになる。

どよめくみんな。慌てて私は李の体を支える。

「大丈夫!？」

李は返事をしない。目が閉じている。おそらく私が支えるのをやめると、李は倒れるだろう。

これって……マズくない!？

「先生! 李が……」

私は手を挙げて叫んだ。けれど、白川は私の前に腕を広げ制止した。

「どうして!？」

「落ち着け、大事にはならない。今、“偽”の功德林が“真”の功德林の脳機能に介入して、年相応の精神や記憶を書き込んでいるだけだ」

「……は？」

あまりにチンプンカンプンな答えに、思わず間抜けな声が出る。

「もうちょっと分かりやすく説明してくれる？」

「……要するに問題ないという事だ。もうじき書き込みが終わる」

すると、李が目を覚ました。

「……おはよ。何か知らないけど良く寝たな」

何か変わってる……！ 李は自分で立ち上がると、

「あ、和湖に白川。本当にありがとね！」

と言った。

何て言うか……言動が少し大人びた、というか……本当はこんなに元気で明るい子だったんだ。

良かった、李が元気になって。

「じゃあみんな、練習に戻ろう！」

「はい！！」

私たちは再びホールに戻り、パート練習に打ち込んだ。

正直、今までは李が本当に静かだったからやりづらかった。でも今は……

「和湖！ これ一回合わせよう！」

「うん！」

賑やかで、とても楽しいんだ。中学生になって、いい友達ができ
たな。

「くーどりー！！ ここ教えてくれー！！」

「うるさいっ！！」

突如乱入してきた田口に向かって投げつけたのは……手榴弾！？

「ぐおあっ！！」

田口の目前で、耳を切り裂くような破裂音を立てて爆発！

「ちよっと李！？」

「平気だって。これは特殊加工がされていて、人体にしかダメージ
を与えないんだ」

「そういう問題じゃないって！！ とうか、笑顔で言わないで！
！」

「うう……お前そういうヤツじゃねえだろ……」

新しくいい恐怖もできました……。

5 部員全員が集まるホール前で（後書き）

これにて、N O . 3 完結です。短かったけど苦戦した……。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4606t/>

wind heart

2011年10月6日16時47分発行